

(別紙2)

## 審査結果の要旨

氏名 轟 孝夫

ハイデガー哲学は、しばしば初期（『存在と時間』（1927）に至る時期）、中期（いわゆる形而上学期（1929-1935））、後期（形而上学の批判期）とに区分され、その間、中期を挟んで初期と後期とでは、根本的な視点の転換があったとされる（ハイデガーの転回問題）。しかし本論文は、こうした見方に根本的な疑義を呈する。それによれば、ハイデガー哲学は初期以来一貫した視点を保持し続けている。それは、『存在と時間』において提起された根本問題の一貫した深化・詳論である。世に喧しいいわゆるナチ問題に関してさえ、ハイデガーの立場は終始一貫しており、確固たる主張が貫徹されている。

本論文は、こうした自らの探り当てたハイデガー哲学の真意を、その広範なテクストを丹念に辿り、証示しようとする。

第一章においては、『存在と時間』が精緻に辿り返され、その主題の何であるかが見定められる。それによれば、『存在と時間』とは、ハイデガー特有の「現象学」の遂行である。すなわち、それは、フッサールにおける「客観化的志向性」とは根本的に異なる「情意的志向性」（愛や憎しみ等）を基盤として、そこに成立する「種別的多様性」――石、犬、自動車、通行人等――をそのものとして保持する「世界」を、顕わにする。この「世界」の顕現（「開示性」）においてこそ、実に「存在」そのものが顕現する（「現象する」）。「日常性」とはこれに対して、「種別的多様性」の失われた、のっぺりとした「事物的存在者」の「一様性」の世界（「所有」を特性とする世界）であり、「存在」が隠蔽された事態なのである。

ここに『存在と時間』とは、本論文によれば、本来明確に「存在論」なのである。

しかし、その実際の論述は「現存在論」、つまり、人間の側からの存在論であるにとどまった。それ故に『存在と時間』は中断され、その継続が放棄されるに至った。その意味は、ハイデガーがまさにかの「存在論」を――「メタ存在論」として――主題化し続けた、ということなのである。

第二章以下は、こうして一貫して展開されるハイデガー存在論の詳述である。ここでの一貫した観点は、「存在」が、存在するものの「全体」と捉えられ、それが「ピュシス（いうならば、生成する自然）」として具体化されるということである。第五章、最終章では、対ナチスに対するハイデガーの態度も、この特有の存在論に則った、抗ナチ的な哲学的に正当・誠実なものであったと、総力を挙げて力説される。

以上、全体として、ハイデッガー哲学を大事にするあまり、ハイデガーびいきの祖述に流れて、哲学的な積極的論議に欠けるきらいがあることは否めない。しかし、ハイデガー哲学を総じて一貫した視座のもので捉え返すという説得的で確固たる論点は、ハイデガー哲学研究に間違いなく一石を投ずるものである。

よって審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位を授与するに値すると判定する。